◆　第十一話　かまどが岩　　（昭和３０年３月２５日掲載）

僅か十六歳の八助は、いまわのきわの父の枕辺に座していました。

病み衰えた父は、「お前の母は産後の日立が悪く、お前を産んで満一年の後、あの世とやらに旅立った。

お前は木の又から生まれたように云いふくめられて来たが事実はこうだ。」と云い聞かされて、八助はびっくりしてしまった。

八助は、色は黒く毛むじゃらで、山男のようにある。それも荒くれた炭焼き渡世の父の手一つで育てられたからに違いない。身体も人一倍大きく力も強いのは、人里離れた巌窟に父と十六才の今日まで住んでいたからである。父が亡くなってから、たった一人で習い覚えた炭を焼きながら暮らしていた。

或る日のこと、朝からすさまじい風が吹いて恐ろしい日暮れ、仕事が済んで帰る途中の山の中で突然、人間のうめき声がする。「はてな」と八助は手に斧（ふ？）して、おそるおそる近ずいて見ると、それは同年輩位の旅の者とも覚しき一人のやんごとなき少年が腹痛の為か、盛んに呻き立てている。

八助はびっくりして連れて帰り、火を起して身体を温めてやるやら、せんぶりを煎じて飲ませてやるやら、それこそ親身も及ばぬ介抱をしてやったのである。その少年はやがて正気にかえり、厚く礼を云った時、八助は思いつめたようにこう云った。
「私は、この岩窟にたった一人で住んでいるものですから、誰一人友だちがないので淋しくて仕方がありません。もしよろしかったら、いつまでもここにいて一緒に暮らして下さいませんか」と。それを聞いた少年も非常に悦んだ。
「私は都の者ですがわけあって勘当され、帰るべき家もない旅人です。どうかそうして下さい。」とその少年を六造と呼び、それから八助と六造は一緒に生活するようになった。

六造は八助を真の兄のように慕い、八助もまた六造を真実の弟として、ただの一度も気まずい思いをしたこともなく過ごして来た。　天気が良ければ二人揃って炭焼くワザに余念なく、雨の

朝、雪の夕は睦まじく炉を囲みながら藁（わら）仕事にいそしんだ。六造はだんだん逞（たくま）しい男になって来た。

　或る日のこと。不図した風邪がもとで、六造は急に病床に伏してしまったのである。八助はそれはそれは気が気でなかった。それからと云うものは、炭焼きもぴたりと止めて、つききりで親身の介抱をした。「ああ済まない。済まない」。六造は手を合わして床の中から八助を伏し拝んだ。「なんのなんの、水くさいそれよりも今日の気分はどうですか」と八助は心配そうに覗き込む。「ああ一向に」。親切にしてくれればしてくれる程、六造には病気になった事が悲しかった。早く快くなって八助と一緒に働きたいと思った。煮たての温かい芋粥をすすめておいて、八助は今しがた採って来たての薬草を煎じ始めた。八助の心には、ただただ一人の病友六造があるばかりだった。

　「ああ、あれから三十年にもなる」。八助は感慨深そうにつぶやいた。薬汁を器にして、見るかげもなくやせ衰えた六造の枕許に坐った。「粥は食べられましたか。薬もどうやら冷めたようです」、「長い間本当に世話をかけたなあ」六造は八助から助けられた日の事を思い出していた。
　八助のこうした親切も何の効もなく、六造はそれから三日目の朝、眠るが如く死んで行った。息を引きとる瞬間まで、六造は八助への感謝を忘れなかった。

　その日の夕刻、静かにリンの音が聞こえて白髪の老人が尋ねて来た。「ただならぬ有様、誰か死人でもありましたか」とその老人は尋ねた。八助は六造の死を物語ると、「それは残念な事。して一夜のとむらいは」と尋ねる。「みかかりの通りの人里離れた岩窟に住む山男」と八助が云うと、「それではこの老僧がとむらいを」と親切に云ってくれたので、八助はいそいそと夕餉（ゆうげ）の仕度をした。
　読経が済んでから、八助は老人に六造との因縁話に花を咲かせた。老人は黙って聞いていた。老人は床に就くや、やがて深々と眠りに墜ちたが八助は六造のことをそれからそれへと思いだして眠れなかった。そうしていると夜もしだいに深けて行く。

　突然天地も崩れるばかりの大音響と共に、俄（にわか）に何ものか近寄って来るらしい気配がする。八助はふと戸口から、白い煙が立ち込めそこには雲を突くばかりの赤鬼や青鬼が、手に手に金棒を持ち近ずいてくるのを発見した。八助は肝をつぶさんばかりにおどろいた。すやすやと眠っていたはずの老人は、突然目を開き「くわっ」と一声気合いをかけて鬼をにらむと鬼はたじたじとなり、ついにいずくともなく退散してしまった。

　八助は全く生きた心地はなかったが、やがて正気にかえり、老人に厚く礼を云うと、「いやいや礼は云ってもらいますまい。実は私はこの深山の主で常日頃からお前が一生懸命に働くのを感心していた。殊（こと）に、六造が病しように伏してからお前の真心は殊勝の限りです。今宵は鬼共がお前を殺して、六造の死骸と共にとって食おうとした所だが、余人ならぬお前こと故不宵、私が守ってやったのです。今後もその心掛けを忘れないで一生暮らすように」とこう云い終わったかと思うと、老人の姿は掻（か）き消す如く、その場から立ち去った。八助はあまりの不思議

さ有難さに、ただ自失せんばかりだった。

　八助の勇ましい炭焼き姿は、又次の日からこのかまどが岩にみることが出来たが、二人ずれでなくひとりでせっせと働くのであった。（完）